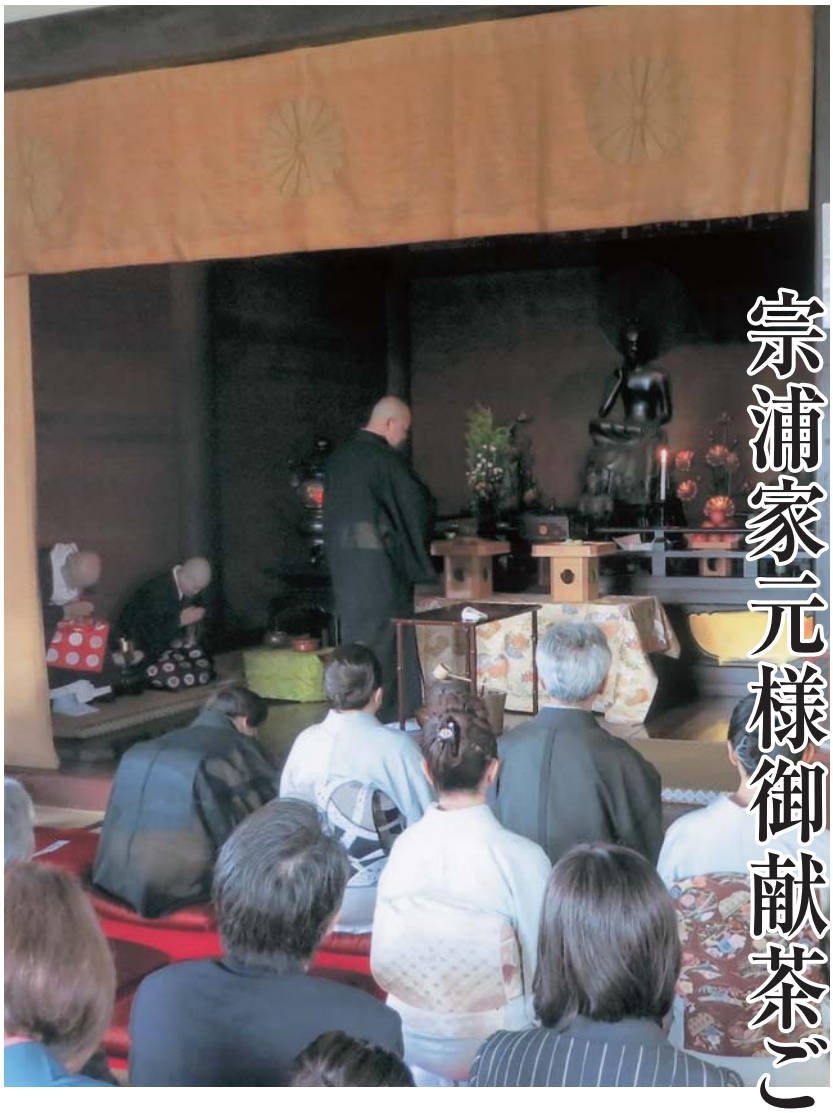
三斎流
九曜会だより

発　行
三斎流九曜会
会長　小林祥泰
事務局　出雲市今市町53



旧斑鳩御所 中宮寺本堂に於て 宗浦家元様御献茶ご奉仕

旧斑鳩御所
中宮寺本堂

中宮寺山吹茶会について

第一回　昭和五十三年四月十五日
お献茶　宗瑞家元・薄茶席（広間席）

第二回　昭和六十二年四月十八日
お献茶　宗瑞家元・薄茶席（奥御殿席）

第三回　平成八年四月十七日
お献茶　宗育家元・薄茶席（奥御殿席）

第四回　平成十八年四月二十三日
お献茶　宗育家元・薄茶席（奥御殿席）

第五回　平成二十六年四月十三日
お献茶　宗浦家元・濃茶席（奥御殿席）
薄茶席（鳩和殿聖光庵）

中宮寺本堂

高松宮妃殿下の御発願により吉田五十八先生が設計され、昭和四十三年五月落慶の御堂であります。当寺は伏見宮様より女王様御二方と御西天皇内親王様御一方を始め、有栖川宮より皇女御三方が門跡として法燈をお守り戴いております。又高松宮は有栖川宮祭祀をお継承になり、殊に高松宮妃殿下の御母君は有栖川宮の最後の皇女であらせられます。このような高松宮と当寺との浅からぬ御因縁から高松宮妃殿下は、寺に万一の事があったらと御心痛遊ばされ、耐震耐火の御堂の建立を念願されこの本堂が出来たのであります。以前の本堂は西向きでしたが、上代寺院の規則に従い南面にし、而も本堂と鞘堂と池とを組み合わせ、門跡寺院らしい優雅さ、尼寺らしいつつましやかさに昭和の新味を兼ね備えた御堂になったのであります。桝組、蟇股等の組物を一切使わない簡素なつくりの中に、高い格調を狙ったことが特徴であり、又池の廻りに黄金色の八重一重の山吹を植え、周囲に四季折々の花木を配し、斑鳩の里にふさわしい女性の寺院としての雰囲気にして戴いております。

本尊菩薩半跏像（如意輪観世音菩薩）［国宝］

東洋美術における「考える像」として有名な思惟半跏のこの像は、飛鳥彫刻の最高傑作であると同時に、わが国美術史上欠かすことの出来ない作品であります。国際美術史学者間では、この像のお顔の優しさを数少ない「古典的微笑（アルカイックスマイル）」の典型として高く評価し、エジプトのスフィンクス、レオナルド・ダ・ヴィンチ作のモナリザと並んで「世界の三つの微笑像」とも呼ばれております。半跏の姿勢で左の足を垂れ、右の足を左膝の上に置き、右手を曲げて、その指先をほのかに頬に触れる優美な造形は、人間の救いをいかにせんと思惟されるにふさわしい清純な気品をたたえています。斑鳩の里に千三百余年の法燈を継ぐ当寺のこの像は、御本尊として永遠に吾等を見守って下さるでしょう。

宗浦家元と中宮寺御門跡様 薄茶席にて

奈良中宮寺山吹茶会

■日　時：平成二十六年四月十三日(日)
■濃茶席：観翠庵直門
■薄茶席：翠尚会（梅村尚子先生）

献茶式　於 本堂　家元 森山宗浦

中宮寺山吹茶会は平成十八年四月宗育家元様の御献茶以来八年振りに担当させて頂くこととなりました。宗浦家元様道統継承後初めての御献茶ご奉仕となられ、宗瑞宗匠の思い出も交錯する感慨深い茶会となりました。濃茶席担当は直門、薄茶席担当は翠尚会が担当いたしました。前日の準備にも、尚子先生のテキパキとした指示に翠尚会の方々は勿論、直門の私達も素早く対応し合同夕食パーティにもどうにか間に合い、明日の本番に向けて一致団結、前日、当日ともに有意義に終えることが出来ました。様々な体験をさせて頂きありがとうございました。

濃茶席　御門跡様・家元様他

薄茶席　翠尚会（梅村尚子先生）担当

濃茶席担当の直門一同

九曜会事業報告

〈平成二十五年七月～二十六年六月〉

○九曜会総会

平成二十五年七月二十一日(日)
ホテル武志山荘

平成二十五年度総会が会員一〇二人の出席の下盛大に開催された。会長様、宗浦家元様のご挨拶に続き二十五年度の事業及び決算報告、二十六年度の事業計画、予算案の審議が承認可決された。

二階山茶花の間で薄茶席を直門が担当した。

午後は京都建仁寺管長小堀泰厳老大師の講演「栄西禅師八百年遠忌によせて～茶祖としての栄西禅師」のお話しに、全員が興味深く熱心に聞き入り、一時間半があっという間に過ぎました。講演内容については後日講演特集号を発行する予定。

○出雲大社亀山茶会

平成二十五年九月十六日(日)

献茶式　午前十時より於・本殿

宗浦家元の御献茶

【濃茶席】

北島国造家　奥書院
来客者数　一四一名

昨年の古事記一三〇〇年の奉祝行事に続き、本年は出雲大社の大遷宮のおめでたい時期に亀山茶会を担当させていただきましたことに感謝いたします。

お床も北島国造家から「御神号」をお出しいただき改めて慶事を享受させていただきました。

昭和六十一年宗瑞宗匠がお献茶をされ、わが師匠の大野春栄先生が拝復席の濃茶席を担当され社中がご奉仕したことが懐かしく思い出されます。

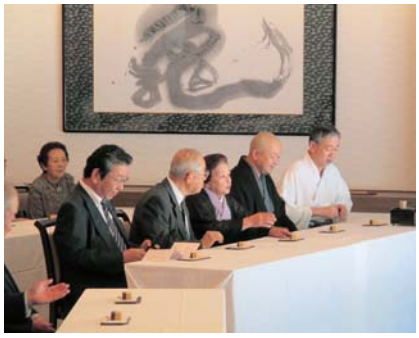
遷宮は全てが蘇ることと聞きます。私どももまた一歩から精進したいと思ったところです。

担当　下垣社中・山本社中

【薄茶席】

北島国造館　亀山会館
参加者数　一九三名

担当　直門



亀山会館　北島国造様・家元・来賓の方々

濃茶席担当　下垣・山田社中の皆さん

○松江城大茶会

平成二十五年十月五日・六日
松江城山公園

第三十回松江城大茶会が十月五・六日に十一流派合同で開催されました。

昨年に続き、松江城城山公園や松江歴史館の他に赤山茶道会館も会場となり又、広島県尾道市の速水流光明寺陣幕会の参加もあり賑やかな茶会となりました。

五日　十三席　来客者数　四四九名
六日　十三席　来客者数　五七〇名

五日は朝から雨となり客足も少なかった。

六日は晴れたが、風が強く茶筅、茶杓が飛ぶハプニングがありました。

松江城大茶会も三十回目であり、今年は一か月間と長いので客足が少なかったのでは！

担当　辰村社中

薄茶席全景　とてもスッキリとした設え

○松江城大茶会

第三十回記念おもてなし茶席

平成二十五年十月十二日・十三日・十四日
松江歴史資料館

十二日　来客者数　八〇名
十三日　来客者数　一一〇名
十四日　来客者数　一二八名

松江城大茶会の賑わいもさめやらん今日、おもてなし茶会の話を頂き準備をして参りました。初日と三日目を、前庭に呈茶席を設営し、二日目は、辰村社中がお点前をされ、お客様も県内は勿論、北海道、東京又、外国の方など多くの方が入館されました。お菓子も歴史館の名工自信作とあって、間に合わない盛況ぶりでした。経験の浅い私共ですが、楽しい茶会でした。これを機に一段、一段、精進していけたらと思います。

担当　辰村・米子・安来社中

5日・6日 2日間席担当の
辰村社中の皆さん

最後にしじみちゃんとハイ、ポーズ

○建仁寺栄西禅師八百年遠諱慶讃茶会

平成二十五年十月二十五日(金)
建仁寺正伝永源院
薄茶席　直門・翠尚会
来客者数　五五七名

当日は全国から沢山のご来客にもかかわらず、かつて経験した事のない大雨は一日中降り続き、忘れ得ぬ茶会となりました。

第一日（十月二十五日）
一、本坊　方丈　建仁寺　四頭茶席
二、霊洞院　藤田美術館　濃茶席
三、西来院　木津　宗詮　薄茶席
四、久昌院　堀内長生庵　薄茶席
五、両足院　表千家大中会　薄茶席
六、正伝永源院　三斎流　薄茶席
七、禅居庵　点心席

建仁寺の「四つ頭茶礼」

栄西生誕を記念して毎年四月二十日の開山降誕会にあわせ、方丈で開かれる茶会。四人の頭（正客）に相伴客が八人つくことからこの名で呼ばれ、室町時代の喫茶法に近いとされる。献香の後、四人の供給が抹茶の入った天目茶碗と菓子器を配り、茶碗に湯を注ぎ右手の茶筅で茶を点てる。

建仁寺本堂にて薄茶を点てられる僧呂方

席担当　直門・翠尚会の皆さん

○十六善神を偲ぶ会

平成二十五年十一月三日(日)
平田本陣記念館
客総数　二三八名

供茶式　午前十時より

当日は生憎の雨天であったが、三斎流宗浦家元様の献茶に続き、般若寺の住職による読経法要が厳修されました。雨天の中お参りのお客様に一服のお茶を差し上げました。雨に洗われた庭園には「満天星つつじ」が一際光っていました。今回でお茶会が終了するとのことで毎年おいでのお客様は淋しくなると名残を惜しんでおられました。雨天に加え、他の行事が多くお客様は例年より少なかったが、その分お茶席の雰囲気を十分味わっていただけたと思いました。最終回のお茶席を担当させていただき社中一同感謝いたしております。

担当　山崎社中

悠々庵　呈茶席の設え

○一畑寺茶会

平成二十五年十一月十六日(土)
一畑寺　本坊書院
来客者数　三七二名

一番の反省は九曜会よりお借りした信楽焼きの数茶碗に新しく三個割れを入れてしまったことです。本当に申し訳なく何とお断りしてよいか、心よりお詫び申し上げます。洗った後の茶碗を温めるのにどのようにされているか教えていただきたいと思います。

全体としては佐藤先生に道具をお願いし、良い席が準備できたと思います。晴天に恵まれ絶景を眺めながら楽しく担当させていただきました。

担当　佐藤社中・野々村社中・加茂会

○三斎忌

平成二十五年十二月一日(日)
法　要　道場書院
濃茶席　松霞亭
薄茶席　富士の間

【濃茶席】
担当　山本社中
来客者数　四六名

前日、当日ともに晴れて風のない穏やかな気候に恵まれたのでお客様も担当の人も明るい気持ちを持ち続けて終始穏やかな状態でいられた。貴重な勉強をしました。役割はそれぞれよくできました。躙いを使ってから躙り口より入る九曜会茶席はこの機会だけなので貴重に思っています。研修会よりお炭、点心など限定人数で隔年交替で参加できる制度があると一層楽しめるのではと思います。時を経て茶の薫りがする良い場所と思っています。

濃茶席お点前　松霞亭

【薄茶席】
担当　大野・加儀社中
来客者数　六二名

大変に勉強させていただきました。一服のお茶に真心こめて美味しくお出ししようと全員が力を合わせて頑張りました。ただ当日釜がゆがんでおり顔面真っ青。準備のより大切さを学びました。お陰様で小春日和のような良い天気に恵まれ本当にありがとうございました。

薄茶席お点前

○早春の茶会

平成二十六年三月二十九日㈯
出雲文化伝承館　出雲屋敷
来客者数　四九〇名

天候には恵まれたが湿度が高く早春の茶会にしては、水屋方は特に大変でした。出雲屋敷に今年から仮設の水道・ガスコンロが設置され大いに助かりました。表舞台、お点前、お運び、後見に至るまで若手に担当してもらい、経験を重ねて三斎流発展のため研賛されんことを希望します。

担当　直門

席担当　直門の皆さん

○新樹の茶会

平成二十六年四月二十九日㈷
濃茶席　観音寺書院
薄茶席　観翠庵道場富士の間
呈茶席　観翠庵書院前庭
来客者数　二二〇名

【濃茶席】

当日は朝からの雨でどうなることかと気をもみましたが、そのうち明るくなり日差しも見え始め、書院から眺める木々も雨に洗われて私どももさわやかな気持ちでお客様を迎えられ、不充分ながらゆったりとした時の流れが何よりのおもてなしとなりました。

ありがとうございました。

担当　大平・大田社中

観音寺書院の濃茶席

【薄茶席】

新樹の茶会は、観翠庵道場富士の間薄茶席を担当致しました。

午前は生憎の小雨となりましたが濃茶席を終ったお客様が一斉に薄茶席へ十五、六人の入席となりますので常に満席で十一人の担当者は忙しい中にも充実した一日を終える事が出来ました。

透木釜に外居棚主茶碗は不東庵作唐津茶碗で大らかでのびのびと心の暖かさを感じさせる茶碗で皆様に喜んで頂けたと思っています。午後は雨も上り新緑の中お客様も二百二十人で新樹の茶会としては最近にない賑やかなお茶会でした。

担当　杉山・樋野社中

【呈茶席】

前日の風雨のためとても心配しましたが、朝雨も上がり昼ごろには日も差し安心しました。しかし、新芽の変わり時でたくさんの葉が落ち朝の掃除が大変でした。テントが張ってあったため日陰になり呈茶席に入られたお客様は、みなさんゆっくりとしてくつろいでおられ良かったと思います。

担当　事業部

書院前庭の呈茶席

○出雲大社大茶会

平成二十六年五月十五日㈭・十六日㈮
出雲大社神苑（東側）
来客者数　十五日　五〇三名
　　十六日　六四〇名

十五日は午前中大雨で芝生に水たまりができ、吹き降りもして外側に面した席は使われなかった。しかし、笛や太鼓で昨年からの奉祝ムードの中で皆様も楽しまれたのではと思います。

四社中何回も集まって連絡を取りながらスムーズにできたことは良かったと思う。久しぶりに立礼で間違わないように何回も練習できてよかった。また、朱傘の下には宗浦家元の短冊「青山元不動」がかけられ外の景色とてもマッチしていた。

担当　杉原社中・今岡社中・福間社中・沼社中

○お堀端茶席

平成二十六年五月四日㈰
松江歴史資料館
呈茶席
担当　米子・安来社中

○今岡美術館十周年謝恩茶会

平成二十六年五月二十四日㈯・二十五日㈰
今岡美術館、リッチガーデン
来客者数　二十四日　二五七名
　　二十五日　二七〇名

来客の席入りについては美術館に従って三十分間毎に一席をこなす、そのことのみ念頭に入れて無心に行った。美術館から言ってほしい事柄があり、合わせて九曜会の名前も出すようにしてバランスを心掛けた。大概好評と聞いています。今岡館長様からは畳のお点前でとても良かったと喜んで頂いた。落ち着きという点で優れているかと思った。二日間はあまりにも疲労が大きくてご遠慮申し上げたい。

担当　山本社中

○講習会

平成二十六年
六月八日㈰
出雲文化伝承館
松籟亭
参加人数　六八名
点前講習
　続き薄茶

細川幽斎の出雲路漫遊
―九州道之記を読む―

和田 貞夫

筆者は、かって森山宗瑞宗匠とともに出雲大社北島国造家において細川幽斎直筆の和歌を拝見したことがある。細川幽斎は、名を藤孝と称し細川三斎の父親で文武両道に秀でた戦国武将であった。

◆細川幽斎、出雲大社参拝

天正十五年（一五八七）四月二十八日、幽斎は出雲大社杵築の宮に参拝し千家・北島両国造家を訪問している。

須佐之男命が出雲の国においでになって初めて和歌をお読みになったという故事を思い出して「この神の初めてよめる事の葉をかぞふる歌や手向なるらん」と詠み両家へ贈ったのである。

細川幽斎（藤孝）

◆戦国大名、細川幽斎（藤孝）

幽斎は、天文三年（一五三四）三淵晴員の次男として京都東山の岡崎の里で生まれたが、一説によると足利十二代将軍義晴の四男だと言われている。

六歳の時、義晴の命令によって晴員の兄の細川元常の養子となり室町幕府三管領の細川家を継ぎ、十三歳で元服して将軍義藤の一字を拝領して藤孝を名のり将軍の側近として忠勤に励んだ。

室町幕府は、十四代義輝が松永久秀に暗殺されて弟の義昭が織田信長の支援を得て十五代将軍職を継ぐが、すでに足利氏には往年の力はなかった。此処までは幽斎は忠誠な足利将軍の家臣であった。

しだいに信長が政治の実権を掌握するようになると、義昭は信長に反目し信長追討の企てを始めるようになり、幽斎はしばしば義昭を諌めるがこれに応ぜず、仕方なく幽斎は山城の清龍寺の居城に引きこもってしまう。

天正元年（一五七三）遂に義昭は信長に降伏し、室町幕府は名実ともに滅亡する。同年、幽斎は織田家の家臣となり、信長より丹後十二万石を長男忠興（三斎）の名義で与えられ宮津に城を築いて入った。

その後、信長が本能寺の変で不慮の死を遂げると明智に組せず細川親子は豊臣秀吉に仕え、豊臣政権のために忠節を尽くす事となり、秀吉の九州遠征に従って出陣し、その功により四万石が加増された。

能筆な幽斎には、多くの著述が残されているが、紀行文としては「九州道之記」と「東国陣道記」の二つがある。

前者は秀吉の九州遠征に従軍した時のものであり、後者は小田原遠征に参加した時の紀行文であるが、いずれも戦記的な記述はなくのんびりした旅行歌日記といったもので、戦いは全て長男忠興と次男興元に一任しており、幽斎の役目は和歌や連歌を詠んで陣中を慰めることであった。

◆「九州道之記」出発

九州全土を征服しそうな島津氏の勢力を押さえるために豊臣秀吉は、天正十五年三月自ら二十万の大軍を動員して京都を出発、幽斎の長男忠興と次男興元もこれに従って出陣した。幽斎はすでに隠居の身であったが、当時まだ五十四歳で武将としての血が脈々としてたぎっており、同年四月二十一日彼も後を追って田辺城を出発した。

二十一日の夜は宮津で一泊し、宮津から船で西へ向かう計画であったがあいにくの雨天のために逗留し、二十四日に出港する。

船は順調に日本海を進み、但馬から因幡の国へ入ることができ、二十五日には居組（いくみ）に宿泊、二十六日に出雲の国に入った。

◆出雲路を行く

二十六日、出雲の仁保之関（美保の関）に入った幽斎は神社参拝の後、かか（加賀）の港に入り漁夫の家を借りて泊まった。かかという珍しい地名に興味を持ち一首詠んだ。

あはれにもいまだ乳のむ
　あまの子の　かかのあたりや
　離れざるらん

二十七日は雨天で海が荒れて出航できず、波が静まってから次の港に船を廻すように指示して一行は陸を歩いて西へ向かうことにし、その日は佐陀まで行き、佐陀の大社に参拝した。

千早振（ちはやぶる）神のやしろや天地と
　わかち初（そめ）つる国のみはしら

二十八日は佐陀から秋鹿に出て宍道湖を小舟で渡って平田に行き平田から徒歩で出雲大社へ向かい、夕刻には杵築の宮に到達できた。

到着早々に杵築の宮の本殿から末社まで参拝し、千家・北島両国造家を訪問、その晩は御供宿（ごくうやど）（参詣者用宿泊所）に泊まった。若狭の国からやってきた葛西という笛太鼓の一座の者が旅の慰めに聞いてほしいと宿に幽斎を訪ねてきた。幽斎は能の観世流の囃子の太鼓の名手であった。当時の名人であった金春文右衛門が幽斎の太鼓を聞いて感動したとの記録がある。

宿には、千家と北島の両家から酒肴が届けられており一同は、気勢を上げて夜更けまで賑やかに舞った。

翌二十九日は快晴で廻した船も到着していたので出発しようとしたところ、北島家から連歌を行いたいので発句を頂きたいとの願い

があり、次の句を詠んで贈った。

卯の花や　神のいかきの
　夕かづら

すると千家方からも発句を頂きたいとの願いがあり、折から鳴いた時鳥の声を詠んで贈っている。

◆石見から長門、九州へ

二十九日に杵築を出発した船は石見の大浦に着いて宿泊し、三十日には仁間（仁万）まで進み、銀山を越えて慈恩寺において宿をとり温泉津に入って宝塔院という寺に泊まった。

温泉津では連歌の会に出席したりしてくつろぎ、五月五日に船出している。現在、温泉津の西楽寺には幽斎の句が寺宝として大切に保管されている。

七日、浜田港を出港し日本海の荒波に苦労しながら西へ進み、長門の国へ入って九州に至り、二十五日に箱崎に着き八幡宮に参詣して博多に入った。

秀吉勢に遅れて一か月半の時が過ぎ、四月に出発して六月三日にようやく秀吉の本陣と合流することができた。

この紀行文は歌人細川幽斎の旅の覚書（メモ）の様なもので、そこには武人としての姿はなく日本海の荒波に苦しみながらも自然の美を楽しむ文人の姿が感じられるのであった。

九州道之記の部分

◆晩年の細川幽斎

慶長五年（一六〇〇）徳川家康は、上杉景勝討伐のため会津遠征を企てるが、三斎は家康に従って東征に従軍、幽斎は僅か五百人の将兵と丹後の田辺城に留守居をしていた。その虚をついて打倒徳川の兵をあげた石田三成は、大阪城外の細川屋敷にいた忠興の妻お玉（ガラシャ）を死に追いやり、手薄な幽斎の田辺城を一万五千の大軍で囲み攻め立てた。

後陽成天皇は、幽斎が戦死をすれば歌道の伝授が絶えることを憂慮し、勅使を下して和睦を勧められ、やむ得ず幽斎は田辺城を明け渡して丹後の亀山城へ移った。六十日余の籠城戦ではあったが、このことは関か原戦の三日前迄一万五千の大軍が足止めとなったので西軍にとって大打撃となり、東軍を有利に導いたのである。

幽斎は、田辺籠城戦を最後にその後は京都に移住し歌道や有職故実の研究に努めて、静かな余生を送った。

慶長十五年（一六一〇）八月二十日、京都三条の自邸において幽斎は老衰のため、七十七歳の生涯を終えた。

当時、豊前小倉の城主であった長男の三斎は急いで上洛したが、老父の臨終には間に合わなかったという。

葬儀は、玉甫和尚の引導により荘厳に行われ、遺骨は南禅寺の天授庵と豊前小倉とに分けて葬られた。

法名、泰勝院殿徹宗玄旨大居士

◆真の武士道に生きる

強いばかりが武士ではないという言葉どおり真の武士道を保持するためには、学問と芸術の道に支えられた高い教養を身につけることが必要であった。

幽斎は動乱の世に生きた当代最高の武家文人で、古典・古今伝授・和歌・連歌・俳諧・書道・茶の湯（武野紹鷗の弟子）・音曲・料理・礼式・有識故実の道を究めた人であるとともに、剣術（塚原ト伝に学ぶ）や弓術に優れ、しかもかなりの力持ちであったという。

学問と芸道の力によって大義名分の何たるかを悟り、真の武士道を貫いて戦国の世を力強く生きた武将であった。

細川家が平成の今日に至るまで、大大名の面目を保ちながら繁栄発展してきたのも幽斎・三斎以来、歴代当主が文武一如の歩みに努めてきた結果であるといってよい。

◆茶の湯の道

茶道と茶道楽に用いられている道の字は、同じ道でも意味するところは異なる。

大金を投じて茶道具を集めて、風流人のように装って楽しむ茶ではなく、幽斎や三斎の茶は静寂で簡素な茶室で一服の茶の香りに俗念を払って心のゆとりを生み出す精神修養、武術の鍛錬を目的とする茶の湯であった。

ある時、蒲生氏郷が細川家には良い茶道具があると聞いて、茶道具を拝見したいと幽斎の屋敷を訪ねたところ、幽斎は代々伝わる刀剣・槍・甲冑などの武具類を飾って氏郷に見せた。氏郷は、自分が見たいのは武具ではなく茶道具であると伝えたところ、幽斎は自分にとって大切な道具といえば茶道具ではなく、武具であると答えたと言われている。このことは、幽斎の茶の湯に対する基本姿勢を示すもので、武士の本分は何かを明らかにしたものである。

ものの ふの知らぬは恥ぞ
　馬茶の湯　恥より外に
　　恥はなきもの

歌連歌乱舞茶の湯を
　嫌ふ人　そだちのほどを
　　知られこそすれ

この歌は、武士本来の務めや武芸の鍛錬を忘れて茶の湯の楽しみに耽ることのないように戒めながら、武士の本分を忘れずに馬術の鍛錬と同様に、茶の湯の精神も体得せよという幽斎の詠んだ教訓の和歌である。

私ども九曜会は、幽斎の長男三斎（忠興）を流祖とする茶系三斎流の修業を志す者の集まりである。

武家茶道たる三斎流の本意は茶道楽の道ではなく心の修養・精神練磨を志す茶の湯の道を歩むことである。

日頃何かと喧騒な現代の世情ではあるが、一層茶の湯の精神研鑽に励み、一服の茶の香りを通して心のゆとりを見出し、少しでも心豊かな生活を過ごしたいと念ずる次第である。拙作な文ではあるが幽斎の本意を微量でも感じとって頂けたら幸いである。

三斎流家元 森山宗浦 茶道具展の開催

・日時　平成二十六年四月二十六日～二十九日
・会場　ホテルツインリーブス（一畑百貨店出雲店）

この度一畑百貨店出雲店五十周年記念の行事として、森山宗浦家元様に是非茶道具展を企画させて頂き度いと百貨店様からのご依頼があり、漸くその実現を見るに至りました。家元様のお茶の大師匠堀内宗心宗匠、禅道の大師匠小堀泰厳老大師様方はじめ、各作家の方々のご協力を頂かれ盛大に展示会が開催されました。その一部を写真で紹介いたします。

主催　一畑百貨店出雲店

各作家さんをご紹介

レセプションであいさつの家元様

力作が並ぶ展示会場

レセプション会場の皆様にお点前で一服

鎌倉建長寺に於て

平成二十五年十一月二十二日

献茶式　宗浦家元

建長寺北条時頼七五〇年忌に宗浦家元様、献茶ご奉仕されました。拝復席（薄茶席）を翠尚会（梅村尚子先生）が担当されました。このことは全国に三斎流の名流を広めることにもつながる事と思います。

建長寺（けんちょうじ）は、神奈川県鎌倉市山ノ内にある禅宗の寺院で、臨済宗建長寺派の大本山である。山号を巨福山（こふくさん）と称し、寺号は詳しくは建長興国禅寺（けんちょうこうこくぜんじ）という。鎌倉時代の建長五年（一二五三年）の創建で、本尊は地蔵菩薩、開基（創立者）は鎌倉幕府第五代執権北条時頼、開山（初代住職）は南宋の禅僧蘭渓道隆で、第二世は同じく南宋の兀庵普寧である。鎌倉五山の第一位。境内は「建長寺境内」として国の史跡に指定されている。

境内

宗瑞宗匠の追憶

遣らずの雨

私ども、出雲市内に勤めていた五人の校長が、茶道「三斎流」の直門として入門を許されたのは、平成元年七月のことであった。

これは、仲間の一人が発起し、他の四人に誘いかけて立ち上げたものである。

現在、全国で茶道家元は六十余流派があると言われる中で、三斎流は利休七哲の一人に数えられた細川忠興（三斎）を祖とする流派で、昭和五十二年、十八世森山祥山宗匠が今市町に観翠庵を開き、流派の所在を移されたものと聞いている。

私たちは、十九世宗瑞宗匠から「五峰会」なるグループ名を頂き、毎月曜日を稽古日と決め、茶の湯の世界に足を踏み入れることとなった。

五峰会のメンバーにとって、本格的な茶道との出会いは初めてであったから、礼の仕方から足の運び、襖の開け閉め、袱紗捌き…と全てが教えられて初めて知ることばかりであった。

入門して三か月経った十月、松江市の明々庵で催された茶会に、濃茶の持ち出し役を仰せつかった。慣れない袴姿で県知事以下並み居る錚々たる参会者の前で、懐から古袱紗を取り出し、作法に従ってお茶をすすめるのは、勇気のいることであった。

週一回の稽古は順調に進んだ。盆点前に始まり、風炉、炉の平点前、入れ子だて、重ね茶碗、四方棚を始めとする棚もの…やがて濃茶、板ものと難しくなるお点前は、憶えるよりも忘れることが多かったり、二つの点前が一緒になったりと、難渋しながらの稽古でもあった。

しかし、私たちは、お点前もさることながら、茶室で宗匠の語りからいろいろ学ぶことも多く、それも楽しみの一つであった。

宗瑞宗匠は、我々よりも一～二年若かったが、書や絵画、漢詩、焼き物等々に造詣が深く、一時、京都の寺院で修行されただけに、禅の世界にも精通なさっていた。また人間的な豊かさを備えた人で、私たちへの心遣いもとても細やかであった。

ある晩秋の夜、稽古も終わり宗匠の語りも一段落したところで、お暇しようとしていた時、茶室の壁を叩く雨の音がした。時雨である、すると宗匠が、「これが、遣らずの雨ですわネェ。」と、しんみりとおっしゃった。

私は、美しい日本の心に触れたような思いがした。しなやかな言葉だと感じ入った。

私たちに、豊かな心の何たるかを茶道を通して感じとらせたかったであろう宗瑞宗匠は、平成六年十月不帰の人となられた。

今も外は時雨れている。

前島　弘尚

編集後記

今年も和田先生には珠玉の紀行文をお寄せ頂き、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。尚来年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

広報部からのお願いでございます。

各お茶席担当の先生方に事務局からの報告書には、感想などなるべく詳しくご記入頂きますようお願いします。茶席の写真など担当の方々に撮影して頂くのが一番かと思います。今迄は広報担当がその撮影のために、どの茶会にも出かけていましたが、やはり全員参加で宜しくお願いいたします。

毎回ですが大あわてでやっと間に合う状態でした。これからは年度はじめにレイアウトを作りデザイン提案をしようと考えておりますので、どうぞご支援ご協力お願いします。

広報部